

母からの流れ

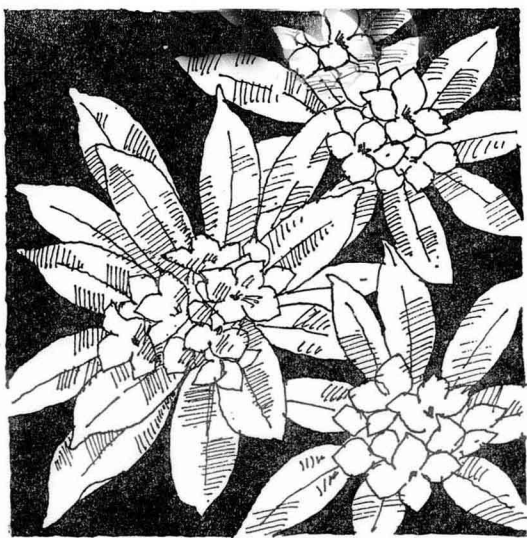
柴田克子・作
藤沢友一・絵



母からの流れ

柴田克子・作

藤沢友一・絵



N. D. C. 913/224p/22cm

母からの流れ

1975年5月15日 第3刷発行

著 者 柴田克子

発行者 東 政彦

発行所 株式会社 **アリス館牧新社**
東京都新宿区簗笥町41 大崎ビル
電話(269)2081〜4 振替東京 9-42502

印刷所 東洋経済印刷K. K.

製本所 ナショナル製本所

(分) 8393 (製) 06061 (出) 0144

© Katsuko Shibata 1973 Printed in Japan

だい I しょう

SPRING

春



中学生になって初めての国語の授業は、「自己紹介」だった。小学校とちがって、学科ごとに先生が変わるのが、まだ、珍しい。しかし、新学期がはじまって十日近くたてば、わたしたち一年B組の生徒たちも、おたがい、すっかり顔なじみになり、だれがおとなしいか、だれがでしゃばりか、授業をまぜっかえすのは、どの人かなんていうことも、かなりわかってくる。米満先生のことを、上級生たちが「ヨネマン」と呼んでいることも耳にはいる。そのヨネマンの最初の授業、つまり、自己紹介の時間に失敗してしまったようで、家に帰る途中も気が重い。

自己紹介は名簿順だった。またまた、名簿順。わたし「若林あさ子」は、いつだって一番ピリときてる。

新井くん、石井くん、猪熊くん……。

ヨネマンが名前を呼びあげるたびに、ひとりひとり、いちおうはきまじめな顔で席を立ち、教壇に登る。

「ぼくは目下、機械をぶっこわすことにこつていて……。」

「頭の形がこんなのでしょ。だから、ぼくのニックネームは火星……。」

話しているうちに、きまじめな顔がくずれてくる。

……春川^{はるかわ}くん、菱沼^{ひしぬま}くん、星野^{ほしの}くん、松田^{まつだ}くん、で男生徒は終わり、いよいよ、荒木^{あらか}さんから女生徒にはいった。

——いやだなあ、こういうのってにがて中のにがて。途中でベルが鳴^なって、わたしまでまわってこなきゃいいな。

なんて考えながらも、時間がたつにつれて、わたしはそわそわしてくる。

伊藤^{いとう}さん、臼井^{うすい}さん……それから……。

「町田^{まちだ}カヨ子くん。」

ポニーテールの町田^{まちだ}さんが立ちあがった。いよいよ順番^{じゆんばん}がまわってくる。まだなにを話したらいいか、まとまっていけない。ああ、どうしよう……。

「松本^{まつもと}じゅん子くん。」

胸^{むね}がドキドキしてくる。松本さんの声って小さい。なにを話しているのか、よくきこえないけれど、教室中がしーんとしている感じ。

「山中^{やまなか}ふさ子くん。」

次^{つぎ}だ。

すんでしまった人ばかりの教室は、それまでよりもさらにうちとけた感じで、わたしだけがからだをかたくしている。山中さんが、はっきりした口調^{くちよう}で話しているのを、わたしは半分うわの空で

きいている。

「さあて、これで最後。若林あさ子くん。」

「はいっ。」

ヨネマンに呼ばれて、わたしは下をむいたまま、ささっと教壇へ走った。ぴよこんとおじぎをして、顔をあげると、みんなの顔がぼやっと重なってみえる。

「あの……若林……あさ子です……えーと……。」

教壇って、意外に高いんだなあ。だれがなにをやっているか、すぐ、わかっちゃいそう。

「あの……。」

もうつかえてしまった。

「あの……わたしの家は母と妹と、女ばかりの三人家族で……。」

「いいな、おれ、いこうかな。」

教室中がいっぺんに吹きだした。さっきから人が話したびに、なにかひとことはさますにはいられないらしい男生徒は、高田くんた。女ばかりなんていったんで、からかわれたんだ。わたしはあわててつけ加える。

「あの、それから、ねこが一ぴきいます。雄ねこです。」

教室中が笑い声ではじけた。わたしのわきの下にじわっと汗がわいてくる。

「それで……あの……母は勤めています。父が四年前に亡くなったので……えーと……。」

なんてへたくそなんだ。「それだけです」って言って、おりちやおうか……。

「趣味は？」

ヨネマンが助け舟をだした。

「読書と。」

ほっとして、わたしはつけ加える。

「それから、バイオリンがひけます。」

「あの、先生。」

ドキッとして、わたしは声のした方へ顔をむけた。また、高田くんだ。

「自分のおとうさんの場合でも、亡くなっているんですか？」

「それなら、なんといいたらいい？」

「……。」

こんどは、高田くんが困って、キヨロキヨロ、まわりをみまわしている。さすがに「死ぬ」という言葉は口にだせないらしい。

「やっぱり、亡くなるのほうか、やわらかくひびいていいだろうな。」

「父は四年前に亡くなりました。」

家に帰る途中、歩きながら、わたしはつぶやいてみる。失敗しちゃった自己紹介。言葉がうまく

でてこなかったということのほかに、なにかが胸につつかえているんだ。

——いまなら、もっとじょうずにできるわ。

わたしの頭の中で言葉が回転しはじめる。

——肺結核で、です。一九五一年(昭和二十六年)わたしが小学二年生の一月に。母は、そのあとすぐに、父の勤めていた銀行にはいり、一か月間講習を受けたのち、電気計算機のマシーン・オペレーターとして働きはじめました。毎日、帰りは六時半すぎになるので、わたしが家のことをやっています。学校の帰りに買物をして、夕食のしたくをするのです。ほら、いまだって、鰯とじゃがいもと、コンブのつくだにのはいった手さげを持っているでしょ？ カバンの隅っこに小さくためる手さげ袋を、いつもいれているんです。家は駅から近いから、一度帰ってでなおしてもいいんだけど、わずか十分ほどの時間も、いまのわたしにはおしいんです。なんだか、中学生になったとたん、いそがしくなった感じ。というのは、わたしの場合、通学に一時間近くかかるからなの。学校から駅まで歩いて約十五分、電車を新宿で一度乗りかえて、東京郊外にあるこの駅まで四十分。それから買物。家につくのは、四時半をとくにまわっています。

まきったら、まきって妹の名前だけど、すぐメソメソするの。まだ小さいわ。二年生になったばかりだから。でも、わたしはあんなに泣きむしじゃなかった。ほんとうよ。寒い日なんて、いっしょに遊ぶ人がいないもんだから、部屋のまん中にペタッとすわって、じっとわたしの帰るのを待ってたりするの。なにかしてりやいいのに、ただすわって、メソメソ、メソメソ泣いているの。わ

たしだつて、気が氣じゃないの、わかるでしょ。

四月にはいって、だいぶ日は長くなったが、さすがにこの時間になると、街には、夕暮れの氣配が、ただよう。西の方から空の色がだんだんうすくなり、風の強い日には富士山をバックに丹沢山塊のりんかくがくつきりと浮かんでみえる。

しかし、このあいだまでは、こんなに明るくなかった。六年生だったわたしの帰りはいまよりずっと早かったのに。

——おかあさん……。

まきは声にださないで、そう呼んでいた。かいねこのピピを、しっかりとだしめて。ねこはあたたかな腕の中で目を細め、ゴロゴロゴロゴロの音を鳴らしているが、だいてるまきの大きな目には、涙がいまにもあふれそうだった。

わたしが六倍という率だったにもかかわらず、抽選で京北大学付属中学校には入れたとき、おかあさんはとても喜んで、こうくりかえした。

「よかったね、あさ子。いい学校にはいれて、ほんとうによかった。付属というからには、有名大学がバックにあるということだし、なにしろ、国立だもんね。費用が安くすむことだって、うちにとつちや、大助かりよ。それにね、あさ子、付属中学と高等学校とは、いっしょに考えていいっていうの。おなじ建物の中にあるんだし、よほど成績が悪くない限り、そのまんま進学できますって。あんたなら、その点、安心していいよ。まきみたいに、ドン尻から数えたほうが早いような成

績せきなら心配しんぱいだけどさ。」

もちろん、わたしだってうれしかった。どんな学校か、どんな先生がいるか、どんな友だちができるか、いろいろ考えて、胸むねをふくらませていた。通いはじめて四、五日は、

——思ったよりたいへん。朝から晩ばんまで時間との追おいかけっこなんだもん。これなら、近く中学校にはいったほうがよかったんじゃないかしら。

って考えた。でも、いまは、

——なんとかやっていけそう、がんばるわ。

って思ってる。ただ、問題はまきだ。まきさえ、わたしの遅おそい帰りに慣なれてくれればいい。

わたしは家のある路地ろじへと足を早めた。そして、横丁よこちょうをまがろうとして、思わず「うふっ」と笑わらってしまった。まきのかん高い声が、思いつき耳をつきさしたからだ。

「ちがう、ちがうってばあ。あんたバッカねえ。さつきから、あたし、なんともいつてるのに、まーだわかんないのう！」

近所の小さい子たちと、石けりでもして遊んでいるのだ。

——よかった。

わたしは、ほんと、息いきをもらした。

おかあさんの足音が近づいてくる。だんだん、家に近づいてくる。いま、おかあさんは商店街しょうてんがいを

ぬけたあたりだ。あと、二、三分で横丁をまがるだろう。わたしにはわかるのだ。

台所には鰯あじを焼く煙けむりがいっぱい立ちこめ、六じょうにも、四じょう半にも、いきどころを失った煙けむりがたまっている。あつ、ごはんがふいている。魚のこげる音、みそ汁しるのにおい。その中にいてわたしには、はつきりと、おかあさんの足音がきこえる。おかあさんのふとったからだど、一日働いたあとのつかれとがいっしょになって、おかあさんの足音は、重い。いつも、まるで、土の中にめりこんでしまいそうなほど、重い。その足音が、だんだん、こちらに近づいてくる。いま、たぶん、おかあさんは、横丁よこちょうをまがったところだ。ほら、あれは、おかあさんの足音だ。

わたしたちがもう少し小さかったころ、おかあさんは横丁よこちょうをまがって、家の前にきかかったとき、おかあさんにしては、いくぶん高い声で、

「あーさちゃん、まーきちゃん！」

と、呼よんで、いま帰ったよ、と合図あいずしたものだ。でも、以前そんなふうにしてた、なんてこと、おかあさんはわすれてしまっただろうな。

おかあさんが帰ってくる。いま、門の前に立ちどまった。そら、門をあけている。二歩、三歩、げんかんのガラス戸どをあけて……。

ちがった。もう一度やりなおした。

いまだ。いま、商店街しょうてんがいをぬけて、横丁よこちょうまで、あと二、三分……。

ガラガラガラ……げんかんの戸とが勢いきおいよくあいた。

——帰ってきた。

「ただいまーっ！」

おかあさんの声がせまい家の中、いっぱいにひびいた。わたしはあんなにおかあさんの帰りを待っていたのに、その声をきくと、むやみに腹が立ってくる。

——なによ、あの声。バカでっかいガラガラ声。もっと、おかあさんらしい声って、でないもの？

「おかえんなさーい！ あのね、おかあさん、きょう、あたしねえ……。」

まぎったら、もうあまえてる。わたしはブンとふてくされた態度で鰯を焼き続けた。おかあさんはコートのボタンをはずしながら、わたしのうしろに近づくと、もう一度大きな声でいった。

「ただいまー。いつも悪いね、あさちゃん、いろいろたいへんだろうけどさあ……。」

「おかあさん！」

わたしのおなかの中になかが爆発した。

「おかあさん、わたしはすぐそばよ。百メートルも離れているんじゃないわ。耳がつぶれそうな声ださないでっ！」

「……。」

おかあさんはくつと肩をすくめると、コートをとり、それから、ストッキングをぬいでくるくるとまるめ、台所の隅にほうった。



そのあと、おかあさんが夕刊ゆうかんを取りあげ、立ったまま読んでいるようすを目の端はしでとらえながら、わたしは肩かたをいからせ、一心いつしんに鰯あじを焼やいているふりを続けた。

——ああ、また、わたしのいけないくせがはじまった。

一瞬いつしゆん、わたしの胸むねは痛いたんだ。

——おかあさんのせいじゃない。もちろんよ。

わたしは心の中で、いっしょうけんめい理屈りくつをならべた。

——でもね、おかあさん、心にもないことをいわないで。ほんとうにたいへんねって、思おもってくれてんの？ わたし近所のおばさんたちにそういわれるんなら、「ええ」なんて笑わらって答こたえられ。でも、おかあさんにいわれると、ちよつとつかえるわ。ほんとうにたいへんって思おもってるんなら、なぜ、わたしの横よこでいっしょにやってくれないのよ。おかあさんは、わたしが食事しょくじのしたくをするのは当然とうぜんって思おもってるんでしょ。これはね、ほんとうなら、おかあさんの仕事よ。ええ、そう、おかあさんの仕事なのよ！

……ああ、でも、わたしって、どうしておかあさんにむかって、すなおに「へいき、こんなこと。なんでもない」って、いえないのかしら。からいばりじゃない。ほんとうにへいきなんだもん。もし、わたしがそういえば、おかあさん、もっと氣きを楽らくにして働はたらけるのに。

鰯あじが焼やきあがった。わたしは身をくずさないよう、あみと魚のあいだにしんちょうにはしをいれ、一ぴぎずつ皿さらにわけた。

「あら、おいしそうに焼けたじゃないの。」

おかあさんは、わたしのふてくされたようすなど、少しも気にしないで、皿を受けとりながら、魚のしっぽをちゃんとつまんでみせた。そして、ほんとうによく焼けてる、というように、わたしの顔をみて、にこっと笑った。わたしもついづられて、にこっと笑いかえして、

——しまったあ！

あわてて、もとの顔にもどそうとした。



夜中、夢うつに雨の音をきいていたように思ったが、目がさめてみると、空の底がぬけたようなはげしき。それに加えて、風もでてきた。

わたしは雨っていうとゆううつになる。なぜって、わたしの雨ぐつときたら、つま先からかかとまでのつぺりしていて、ぬれた道路をふつうに歩いてもつるすべるからだ。うっかりぬかるみにでも踏みこんだら、すーっと重心がなくなつて……あとは、どうなるだろう。考えただけで、ぞつとする。でも、水がもらないだけでしたから、わたしは「買ってよ」と、のどまででかかった声をコクンとのみこんでしまう。

雨ぐつだけではない。かさもいうことをきかないのだ。この風だもん、駅までいかないうちに、まず二回はオチヨコになりそう、そう考えただけで気が重い。わたしは風がおそいかかるたびに、男もののような黒いかさと格闘しなければならぬのだ。そして、帰りは、オチヨコのかさに、重いカバン、買物袋。考えただけで泣きたくなる。きれいな花もようのかさがほしいなあ。無地ならば、ピンクか、みず色のかさがいい。

わたしは髪をとかしながら、沈んだ気持ちで雨の音をきいていた。

おかあさんは、きょうも、朝食のしたくをしながらうたっている。

おおー ひばり たかーくまたー

かろーく なにーをか うとーうー……

十八番のメンデルスゾーンだ。おかあさんがうたうと、どんなにテンポの早い曲でも、アダージョ（ゆるやかに）になってしまう。「おお ひばり」でなくて、「おお あひる」とうたったほうが感じがでると思うんだけど。わたしは髪を結びながら、

「おお、あひるー。おおー、あひるー。」

と、小さくうたってみる。

歌がひとくさりすむと、おかあさんは、ラジオのスイッチをいれる。早朝の番組に、きくともな